

日中経済交流研究会新聞

日中経済交流研究会・12月例会報告

耐え続けたから今がある

～中国ビジネス13年間の苦悩と覚悟～

報告者 東邦電器産業（株） 代表取締役社長 長谷川 清一 氏

日時 令和2年12月14日（月）

場所 Zoom / 参加人数 53名



企業プロフィール

所在地：大阪府柏原市国分東条町

事業内容：電子部品（ワイヤーハーネス）などの製造・販売

創業：1962年

社員数：日本32名、中国236名

1995年、広東省で生産開始

東邦電器産業は長谷川さんの祖父母が1962年に立ち上げた電子部品の工場です。大手電器メーカーと直接取引し、さまざまな家電製品の中に同社の部品が多数使われています。高度経済成長の波に乗って会社は順調に拡大しました。

ところが1990年代になって同業他社が中国での生産を始めます。もはや国内生産だけでは価格競争力がなくなる。当時社長だった父、そして一緒に経営していた叔父の決断により1995年に中国広東省に進出します。

長谷川さん自身は1971年生まれ。大学生活はアメリカ・シアトルで送りました。工場を継ぐ気はありませんでしたが、父の「帰ってこい！」との一喝で入社を決めます。

入社した1996年は同社が中国生産を始めたころ。しかし英語でビジネスをしたかった長谷川さんは中国に興味がありませんでした。ところがその後、父と叔父の確執が表面化し、二人は分裂。そこで2007年、長谷川さんが中国工場に赴任します。

辛抱の始まり

毎月の半分は中国での生活、中国語がわからないなか日本では考えられない経験が待っていました。

着任してすぐ、身近な人が相次いで亡くなります。一人は日本人社員で心臓発作でした。遺体がトラックの荷台へ無造作に投げ込まれる衝撃的な光景。中国ではこれが普通でした。「この国では死ねない」と思います。もう一人は日本から出張で来た大手企業の社員。高速道路に60センチメートルもの陥没があり、車がスピンした末に放り出されて死亡。同乗していた長谷川さんも重傷を負いました。

さらに信用していた通訳女性による不正行為（横領）が発覚。また中国ビジネスでは避けて通ることのできないワイロ要求にも悩まされました。

これらの経験から、中国では「だまされないようにするのではなく、だまされるのをいかに少なくするかが大事」と悟りました。

中国ビジネスに本気

もともと中国に興味がなく、父親の命令で駐在に来たという受け身の考えでした。「妻子がいなければ自殺したかもしれない」とまで思い詰めていたところ、ある中国人にこう諭されました。「悪い経験をするはこの国ではたくさんある。それを追及するよりも、本業に専念した方がいい。小さなことにこだわらず、会社を発展させることに集中する。もっと広い視野で物事を捉えてください」。パッと目が覚め、中国ビジネスに本気スイッチが入りました。

やがて加工ビジネスの世界も変わり始めました。北京政府の方針変更から「来料加工」という従来の方式が通用しにくくなり、ビジネスモデルの転換を迫られました。また、父と叔父の長年の確執から「いまの工場を出て、自分の自由になる工場をつくりたい」との願望もありました。新しい工場候補地を探し続け、独力で契約。このころには通訳の力を借りることがないほど中国語も上達していました。ストライキで荒れる労働者たちとの労使紛争では、身の危険も覚えるなか粘り強い交渉で解決。そして2018年、広東省惠州の新工場をつくり上げました。

中国語訳の経営理念

2017年に同友会に入会してから経営の学びを真剣に始め、経営理念も作りました。今年はコロナ禍により中国出張がまったくできていません。しかし現地から朝礼の様子が携帯電話に動画で送られてきます。中国語に訳された経営理念が唱えられる光景を見て、自分がいなくても自律的に稼働する中国工場に感慨を覚えます。

この12月例会は、同友会に入ってから3年目の長谷川さんにとって人生初の本格的な経営報告でした。質疑応答では、中国ビジネスでの辛抱を振り返って思わず涙がこぼれました。長谷川さんの在中13年間の苦勞がしのばれ、Zoomの画面越しに熱い思いが参加者に伝わりました。

まとめ：日中経済交流委員会 例会委員長
坂元 正三 坂元鋼材（株）